# 第30回発展途上国研究奨励賞の表彰について

アジア経済研究所は，昭和38年以来，発展途上諸国の経済などの諸問題に関する優秀論文の表彰を行ってきた。昭和55年には，「発展途上国研究奨励賞」として，この領域における研究水準の向上に一層資することを目指して，その対象を社会科学およびその周辺の調査研究事業の著作全般に拡大した。表彰の対象は，前年の１月から12月までの１年間にわが国で一般に入手できる形で公刊された図書，雑誌論文，文献目録などで，発展途上国の経済，社会などの諸問題について研究し，また分析したものである。

平成21（2009）年度は各方面から推薦された44点を選考したが，最終選考で下記の作品が選ばれた。表彰式は７月２日に当研究所において行われた。

〈授 賞 作〉

**『所有と分配の人類学――エチオピア農村社会の土地と富をめぐる力学――』**

（世界思想社）

**松村　圭一郎**（まつむら　けいいちろう）（京都大学大学院人間・環境学研究科助教）

〈選考委員〉

**委員長：**絵所秀紀（法政大学比較経済研究所長），**委　員：**小島麗逸（大東文化大学名誉教授），末廣昭（東京大学社会科学研究所長），豊田利久（広島修道大学経済科学部教授），脇阪紀行（朝日新聞社論説委員），白石隆（アジア経済研究所長）

〈最終選考対象作品〉

最終選考の対象となった作品は授賞作のほか，次の３作品であった。

何　立新著『中国の公的年金制度改革』（東京大学出版会）

金　成垣著『後発福祉国家論――比較のなかの韓国と東アジア――』（東京大学出版会）

戸堂康之著『技術伝播と経済成長――グローバル化時代の途上国経済分析――』（勁草書房）

◯講　評◯

# 松村圭一郎『所有と分配の人類学――エチオピア農村社会の土地と富をめぐる力学――』

絵所　秀紀

なんといっても現地調査能力の高さが評価できる。本書は，オロモ語とアムハラ語を駆使しつつ，様々な民族が居住するエチオピア西南部コンバ村での人類学調査にもとづいて，「富の所有と分配」という大問題を再考するという大胆な構想によって支えられたモノグラフである。

「序論」では，「富の所有と分配」という問題が人類学の中でどのように理解されてきたのかについて，先行研究の批判的な検討がなされる。その上で，「権威の所在」という観点から所有をめぐる諸問題を理解するというメイン・テーマが奏でられる。第Ⅰ部「富をめぐる攻防」は，ある農民世帯の行動を中心に据えて，土地から生み出された作物などの富がどのような形で「分配」されているのかを詳細に叙述したものである。自らの所有する土地から生み出された収穫物（自給用作物）であるトウモロコシが親族だけでなく見知らぬ者にまで分配（贈与）されていることが観察される一方，換金用作物（商品）であるコーヒーにはこうした行為はみられない。こうした富の形態によって生じる分配形態の相違には社会関係の違いが重ねられていると論じられる。第Ⅱ部「行為としての所有」では，コミュニティ・レヴェルで土地がどのように所有され利用されているのかに焦点をあてている。コンバ村には，トウモロコシ畑，コーヒー林，放牧地（低湿地），屋敷地があるが，こうした様々な土地の利用のされ方がその所有のあり方に一定の規則性を与えていることが論じられる。丘陵地にあるトウモロコシ畑とコーヒー林が個人によって所有／利用されているのに対し，低湿地は村の誰でもが放牧のために利用できる土地である。しかしこの丘陵地にある土地も複数の受益者によって利用されており，受益者間の資源をめぐる争いや対立が土地所有のあり方を不安定なものにしている事例が報告されている。分益小作地をめぐる地主と小作との間の争い，土地相続をめぐる家族間での争いなどである。土地所有をめぐる争いは異なる権威にもとづいた主張をめぐって生じており，その結果不規則性に満ちたものになっていると論じられている。第Ⅲ部「歴史が生み出す場の力」は，コンバ村の土地と農民との関係がどのように変化してきたのかという歴史過程の考察である。調査地は，18世紀後半のゴンマ王国時代，19世紀末のエチオピア帝国への編入，1974年以降の社会主義化の進展，80年代末の内戦，そして91年以降の現政権の樹立へと激しい変動を経てきた。この過程で，土地所有をかたちづくる権威がますます多元化した様子が描かれている。

「結論」では，「多元的権威社会」における所有と分配は「人々が複数の異なる枠組みの中で相互行為をくり返していることでかたちづくられて」おり，「ある種の一元的な構造をもった原則（慣習法や宗教的規律，国家の法）にもとづいて富の所有や分配を行っているわけではない」と強調されている。モラル・エコノミーと市場経済という２つの原理は「ひとつの社会の

中でともに観察される行為の形式」であり，社会のコンテクストに応じて変化するものであるとの認識が示されている。

きわめて野心的で果敢な挑戦にみちた作品であることがうかがわれよう。こもった気合が筆力となって伝わってくる。先行研究の限界を論破していく筆致は鮮やかである。本書の最も魅力的でかつ本質的な部分は第Ⅱ部である。第Ⅱ部と比較すると，第Ⅰ部は土地所有を前提とした上での収穫物の「分配」をめぐるものであって，むしろ派生的な問題である。収穫物の他者への一方的な分配行為（贈与）が「おそれ」によって生じていることを明らかにしたことは，たしかにアフリカ社会の理解にとって興味尽きない点である。しかし，商品としてのコーヒーは喜捨（贈与）の対象とはならないが，「飲むコーヒー」の場合には近隣の世帯の人々を招くという意味で「富が分配」されていると論じる時，それもまた「おそれによる贈与」といえるのかどうか，疑問が残る。また第Ⅲ部は，第Ⅱ部の議論を補強するものとして位置づけられるもので，「大きな物語」とともにアッバ・オリとその家族の土地をめぐるライフヒストリーがつづられている。

繰り返しになるが，第Ⅱ部での主張「土地の利用が所有をつくる」が本書の核心的な部分である。作者の指摘するとおり，法は誰も従うものがなければ紙に書かれた文字にすぎない。履行されてこそ法である。また，わが国のような近代法（私的所有権）が確立した先進国であっても，富の分配や相続をめぐる紛争や裁判はあとをたたない。「所有のゆらぎ」を指摘した作者の貢献は大きい。しかしたとえそうだとしても，「社会に埋め込まれた経済」論の意義がなくなるわけではない。商品（私的所有＝独占される富）と贈与（分配される富）という２つの異なる形式が並存しているというゴンマ村での観察に説得力はあるが，そこから私的所有権の正当性は想像にすぎないと主張することは飛躍である。作者のいうようにいかなる社会であれ私的所有権が及ぶ範囲に限りがあることは事実であるが（先進国であっても「家族」の中にまで私的所有権が浸透しきることはむしろ例外であろう），私的所有権の正当性が想像だとするならば，市場経済も，その発展を支えてきた生産力の向上も技術の進歩も想像の産物ということになってしまう。近代社会における私的所有権の普及は「力」によってのみ支えられてきたわけではないという点に，いっそうの想像力を働かす必要があるように思われる。いずれにせよ，本書はエチオピア・ゴンマ村でのフィールド調査から得た知見をベースにしつつ，今後とも多くの議論を呼び起こす挑発的な著作として，審査委員一同が高く評価した作品であった。

（法政大学比較経済研究所所長）

## ●受賞のことば——松村（まつむら）　圭一郎（けいいちろう）

発展途上国研究奨励賞という歴史ある賞を賜り，また今回，文化人類学のフィールドワークにもとづく民族誌を評価いただけたことに，心から感謝いたします。

私は，1998年にエチオピアの調査をはじめて以来，同じ村に通い続けてきました。人類学的な調査が，人びととの信頼関係を築いてはじめて可能になる，ということもありますが，行くたびに新しい出来事に遭遇し，わからないことが増える，というくり返しでした。『所有と分配の人類学』は，ひとつの村に生きる人びとの暮らしと彼らが経験してきた歴史を記述する，とてもミクロな研究です。ただ，このエチオピアの村の調査を，ある地域社会を理解するためだけのものに終わらせたくない，という思いも抱き続けてきました。たとえアフリカの農村研究であっても，日本で生活するわれわれがそこから学び，考えるべきテーマをとりだすことができる。それを自らの課題としてきました。

おおまかには，西洋近代と非西洋社会という二元論をのりこえる試みといえるかもしれません。最初にあえて日本での経験をあげて，エチオピアの事例と日本のわれわれの問題が同一線上で考察できることを示そうとしました。現在も，近代的な「私的所有権」を批判的に検討する議論が重ねられています。拙著は，非西洋社会に私的所有とは異なる所有概念／制度がある，という従来の視点ではなく，エチオピアであれ，日本であれ，複数の所有のかたちがコンテクストごとに並存していることに注目しました。所有を固定した制度，あるいは文化に根ざした概念ととらえるのではなく，日常的な実践に即して動態的に理解する重要性を示したものです。

「所有と分配」というテーマは，分野をこえた広がりのある問題です。今後も，人類学的な方法論にこだわりながら，異なる分野の方にもお認めいただける研究を目指して努力していきたいと思います。

### 略歴

1975年　熊本生まれ
2000年　京都大学総合人間学部卒業
2005年　京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程修了
2005年　京都大学大学院人間・環境学研究科助手
2007年　同助教

### 主要著作

#### 著書

（分担執筆）「社会空間としての「コーヒーの森」：ゴンマ地方における植林地の拡大過程から」福井勝義編『社会化される生態資源』京都大学学術出版会　2005年。
（単著）『所有と分配の人類学』世界思想社　2008年。

#### 論文

「社会主義政策と農民—土地関係をめぐる歴史過程：エチオピア西南部・コーヒー栽培農村の事例から」『アフリカ研究』61号　2002年。
「市場経済とモラル・エコノミー：「売却」と「分配」をめぐる相互行為の動態論」『アフリカ研究』70号　2007年。
「＜関係＞を可視化する：エチオピア農村社会における共同性のリアリティ」『文化人類学』73(4)　2009年。